

笹川平和財団・日本財団・DF夏期プログラムでは、始めに田中さんのお話を伺った。田中さんは、IEAの前事務局長だったということで、エネルギー資源について多くのことを聞くことができた。エネルギー資源は国により産出量が当然異なってくる。中でもそれが顕著なのが石油だそう。石油産出国の多くは中東に集中している。世界中で石油が必要とされている今、仮にホルムズ海峡が封鎖されるなど予期せぬ事態が起きた時には、そのことが多くの国々に多大なる影響を与える。そこでポイントになってくるのが再生可能エネルギーだという。再生可能エネルギーは安価で、環境に与えるダメージも小さいため、この分野の発展が重要だということだった。最近日本で発売された電気自動車は、石油の時代を終わらせるのではないかと危惧されるような商品だということだった。しかし、日本ではその電力も輸入してくる資源によって作り出している。私は、再生可能エネルギーを使った発電をよりよくすることも大切だと思ったが、やはり電力使用量の削減も大切だと思った。宇宙から見ると、日本は小さな島国でありながら電気の明かりで輪郭が浮かび上がっているという。それだけ発展しているということなのかもしれないが、使いすぎているのではないかと私は思った。街の中にあるものにもやりすぎではないかと思うものがある。例えば自動販売機である。同じ場所に何台も置かれてはいるが、もう少し撤去してもよいのではないかと思う。飲み物の保温や保冷、照明などには電気が使われている。このような小さなことも積み上げれば大きな変化があるだろうと思うので、節電の意識をもっと持つていくべきだと思った。また、街の中にあるパブリックビューイングも同じように思う。今回東京へ行き、驚いたことの一つでもある。すぐ近くに三つも四つもあるのだ。今は携帯電話やスマートフォンが普及しているので、たいいてい情報は手元で分かる。それに加え、多くの人はほとんど見もせずに通り過ぎていく。広告としては大きな意味を持つかもしれないが、消費電力を考えると多少なくともよいのではないかと思った。田中さんによると、今各国が行うべきは、問題について自分たちが何をしたらよいか考え、その障害を知って目標から逆算したシナリオを作っていくことだということ。世界的な問題であるため、各国間での協力も大切だろうと思った。

続いて、四名の方からお話を伺った。最初は安達さんからお話を伺った。安達さんによると、海外へ行くことで自分の目で様々なものを見ることができ、貴重な経験になるということだった。私も同じように感じる。より多くの生きた情報を取り入れ、自分の糧とするにはやはりそのような経験が大切になってくるのだろうと思った。また、より良いものを生み出すためには相手の意見をよく聞き、相手側の視点にも立って考えることが大切だということだった。これは今もこれからもずっと大切なことだろうと思った。話し合いをするうえで、よい結論を出すためには互いの意見を尊重して、良い点を見つけ出しうまく合わせていく必要があると思った。そのためには、相手の意見と自分の意見の両方を深く考えておくべきだと思った。安達さんは元社長で、社長の一番の仕事は次世代を担う人材

の育成ということで、その育成のプロセスでは、仕事のハードルを少しづつ上げていくということだった。自分が社員なら、周囲に比べて厳しく言われていたら落ち込んだり嫌な思いばかりするように思ったが、期待されていることの裏返しでもあるので社長側から見ればありがたいことなのだと思った。また、外国語を学ぶ上で必要なのは現地で会話を重ねることということで、やはり日常の中で対象の言語を使うことが一番の近道なのだろうと思った。

次に日高さんからお話を伺った。日高さんは大学時代、当時のクラスメイトとハンセン病の支援活動をきっかけに今の自分があるということ、興味を持ったものに、ハードルを上げずに熱心になりきることが大切になってくるということだった。やりたいという気持ちを持ちを大切に、ハードルを上げないというのはこれまで思ったことがなかったが、自分の進路を考えると効果が出てくるのだろうかと思った。

続いて守屋さんからお話を伺った。守屋さんは食品会社で商品開発をしてきた方で、新しいものを作るうえでの心構えなどについてお話を伺った。まず会社で働く上での基本は目の前にある与えられた仕事に妥協することなく全力で取り組むことだということだった。自分の経験に置き換えて考えてみても、何かをやりきると、その経験が次に生きてくることもあると思う、そのような地道な努力が成功に近づいていくのだろうかと思った。新しい製品を作るという仕事ならではの苦勞として、何が何だかわからないような状況で模索しなければならぬということが挙げられた。アイデアが思い浮かんでも実際に試してみるとイメージと違っていたり、課題が漠然となると、壁にぶつかってしまう。しかし守屋さんによると壁は乗り越えられるものではないということだった。物事を様々な面からみていくことや、その壁の前でベストを尽くすことこそが大切だということだった。力技で乗り越えるのではなく、工夫を凝らすことが重要なのだろうかと思った。また、何かしらミスをしたときにはリカバリーが必要であり、後悔や反省は後ですべきということだった。

このことは会社員の父親もよく言っていることなので、社会に出ると最も基本的でなくてはならない考え方ののだろうかと思った。守屋さんは海外で勤務していたこともあるそうで、現地に行く上で大切なのは変な先入観を持たず、自分で感じたものをたいせつにすることだそうで、国内の偏った情報に踊らされるのはよくないことなのだろうと感じた。海外では、意見を発信しなければ意味のない人間にしかならないということで、今のうちから話し合いなどにおいてちゃんと自分の考えをまとめる癖をつけておこうと思った。

最後に、村上さんからお話を伺った。中村さんはPPPの交渉役として海外で多く仕事をされており、お話の中でも世界に出たときの考えなどについて多くお話を伺った。海外で仕事をするうえで話題になりやすいのは、その人の出身国についてということ、日本人として自国のことを聞かれたときに返答に困っているのは少し情けないものになってしまふのだろうと思った。海外を知るより自分の国を知っていくことが大切なものなのだと思う。そして大切なのは相手との共通点を見つけていくことだそうで、そこから協力してやっていこうという姿勢を見せていくことが大事だということだった。また、海外で働

く上で必要なのは語学力とコミュニケーション能力そして専門的知識ということだった。考えてみると、様々なことに対応できる広く浅い知識より、より深く熱中して話すことができるような話題があるほうが人とコミュニケーションを取りやすいように感じるので、世界でも同じことが言えるのだと思い、少し驚いた。

皆さんの話を聞き、まず感じたことは自分の意見や思っていることを貫く姿勢と、それを伝えるコミュニケーションが大切だということだ。海外での活動も含め、協力して一つのこと集中して取り組みながら、人の意見に耳を傾けて常に自分の考えと相手の考えを比べ考えるようにしたいと思った。